

非伝統的金融政策の経済分析

竹田陽介、矢嶋康次著

ゼロ金利政策や量的金融緩和を含む非伝統的な金融政策は有効なのか。その理論的・実証的な分析を試みたのが本書だ。「非伝統的金融政策に対して最も効果的に反応する資産価格は、信用スプレッド」などという推定の結果も示しながら、中央銀行が金融資産の市場流動性を高める「最後の買い手」として機能する点を評価する。経済学の専門的な知識が要るが、金融政策を巡る最新の論点を網羅した好著といえるだろう。(日本経済新聞出版社・4800円)

バイオマスエネルギー

・ビジネス

小澤祥司、浦上健司著

間伐材や食品廃棄物といった未利用の生物資源を発電燃料や熱源に使うバイオマスエネルギーは、大きく伸びる可能性がある。再生可能エネルギーの一つだ。本書はバイオマスを実際に活用している日本各地の取り組みを紹介し、定着させるための課題を分析している。高度で複

雑なシステムでなく、バイオマス原料の調達や機器の製造・保守を地域で完結させられる「身の丈にあった」仕組みが導入成功のかぎだとの指摘は興味深い。(七つ森書館・2400円)

中央銀行制度の経済学

折谷 吉治著

日本銀行から大学教員に転じた著者が、中央銀行の基本構造や主な機能について、経済理論を駆使しながら詳細に解説している。各国の金融政策に注目が集まる中で、中央銀行の組織や日常の銀行業務、決済システムでの役割など見落とされがちな部分に焦点を当てた。「中央銀行も一つの組織である」との認識に基づき、ガバナンス(統治)上の課題を示す。公共的な色彩が濃い他の組織のガバナンスを論じる際にも参考になりそうだ。(学術出版会・7200円)

箱根駅伝

読売新聞運動部著

学生長距離ランナーの憧れの舞台、箱根駅伝。出場した選手たちの足跡と大会の歴史を振り返る。4度の区間賞を獲得し「山

の神」と呼ばれた柏原竜二。大学4年の時に五輪代表に選ばれた瀬古利彦は、最後の箱根で区間新記録を出しながら、五輪ボイコットという悲劇を味わった。近年は「有力選手が箱根で燃え尽きてしまう」といった有害論もあるが、本書からは2014年に90回を迎える大会の重みが伝わってくる。(中央公論新社・1500円)

東京フルズゴールド

川崎 大助著

1990年代の音楽シーンを

席卷したかつてのロックスター。落ちぶれて業界最大のレコード会社を相手に詐欺を企てるが、思わぬ事態が次々発生し、追われる身となる。音楽雑誌「米国音楽」の元編集長による小説デビュー作は型破りなエンターテインメントだ。裏社会の外国人や闇業者まで絡み、主人公の境遇は目まぐるしく変転する。520ページの長編ながら、快速の筆致で飽きさせない。音楽業界の生々しい描写が荒唐無稽な物語に説得力を与えている。(河出書房新社・1900円)

文庫・新書

■『ダンスホール』 佐藤正午著

亡くなった女性ピアノ教師がひそかに毎日の体重を記録していたメモ帳が見つかる。かつての教え子で会社役員の男は自分の妻も同じような記録をつけているのを見つけ、妻の浮気を疑うようになる。巧みな語り口で平穩な日常に潜むサスペンスを描き出す「空も飛べるはず」など5つの中短編を収録。(光

文庫文庫・600円)

■『かつお節と日本人』 宮内泰介、藤林泰著

伝統的な食材でありながらも生産量を増やしているかつお節。その300年に及ぶ歴史と、沖縄、東南アジア、ミクロネシアなどの人々とのつながりを解き明かす。明治期の殖産興業政策や日清・日露戦争によって生産量を増やしたことなど、日本の近現代史に密接に絡む事実を数多く紹介している。(岩波新書・760円)